

健康

豆知識

毎月第1火曜連載

vol.2 ピロリ菌にご用心

のは、1980年代になってウォーレン博士とマーシャル博士によって再発見されてからです。両名はその功績を称えられ、2005年にノーベル医学賞、生理学賞を受賞しています。さらに94年には国際がん研究機関（IARC）が正式にピロリ菌の発がん性を記載しました。

世界的には約5割の人がピロリ菌に感染していますが、衛生環境の悪い発展途上国ではその比率が高くなっています。日本においては、20〜30歳代の世代の保菌率は2割と低いのですが、40歳以上では発展途上国並に高くなっています。戦後の急激な衛生状態の改善が若年層の保菌率低下の要因と考えられています。

ヘリコバクター・ピロリ（*Helicobacter pylori*）は「ピロリ菌」として知られ、胃の炎症や潰瘍、果てはがんを引き起こす原因になることをご存知の方も多いのではないのでしょうか。もともとピロリ菌の存在は19世紀始めにすでに知られていましたが、それが人に慢性的な胃炎を起こすと判った

透により格段に減少してきましたが、

中高年以上のピロリ菌の保菌率をみると、潰瘍や胃がんになる予備軍は依然として高いといえます。

ピロリ菌は、早い時期に口移しや食器の共有などにより親から子どもへ感染したり、汚染された水や食品が口に入ることによって感染します。

胃の内部は極めて高い酸性で、本来細菌を含め生き物が生存するには非常に過酷な環境です。しかし、ピロリ菌は自分で酸性の消化液を中和する酵素成分を出すことによって胃に住み続けることが出来るのです。

その酵素や細菌自体が出す毒素が慢性的な炎症を起こし、また細胞の修復を邪魔して結果的にがんを引き起こすと考えられています。

つまり、潰瘍や胃がんを避けるためには、定期的なバリウム検査、内視鏡検査などによる早期発見に加え、ピロリ菌感染の有無を調べ、治療を行うといった予防が重要なのです。

世界の約5割の人が感染

定期検査で早期発見を

中釜知則

Tomonori Nakagama M.D., MPH.

プライマリ・ケア、産業/予防医学専門医。内科をはじめ、婦人科、小児科の診療を手がける。広島大学総合科学部卒業、セーバー医科大学卒業、イリノイ大学シカゴ医学部産業/予防医学科卒業。病气やけがの予防に重点を置くアドバイスも行う。

日本クリニック

15 West 44th St, 10th Fl (bet 5th & Madison Ave)

●問合：212-575-8910

